

佐川 和茂 著  
(経営学部教授)

『ホロコーストの影を生きて  
—ユダヤ系文学の表象と継承—』

三交社 2009年5月刊 2,100円  
青山学院大学総合研究所叢書

[評者] 田 中 啓 史



本書は『ソール・ペロー研究』、『越境周縁・ディアスポラ』、『アメリカ文学と暴力』などユダヤ系文学に関する数多くの著書を持つ著者が、一九八六年から二〇〇九年までに発表された論文を「ホロコースト文学」というキーワードのもとにまとめた、いわば「佐川のユダヤ文学」の集大成ともいえるべきものである。第一章「一九六〇年代アメリカとホロコースト文学」では、ヒトラーによる六百万といわれるユダヤ人の虐殺、つまりホロコーストの、生存者が直接体験を語るものから、アメリカの作家たちによる被害者の目撃、伝聞など間接描写を駆使した作品までを紹介しながら、ホロコースト文学とは何か、という根本的な問題に迫っていく。

なぜ我われはホロコーストのような悲惨な状況を描いた文学を読むのだろうか。この疑問に著者は「ひとの善悪の混交を大きな振幅をもって表現している、神と人との論争を真剣に展開している、極限状況に直面した人の生き方を追真性をもって表現している」からだと答えている。E・L・ウォーランドの『質屋』に描かれるユダヤ人店主と黒人使用人の絆と犠牲、J・コジンスキーの『ペンキを塗られた鳥』に登場する皮膚、眼、髪の色の違いだけで虐待する人々を見ると、対話が失われ、理性を喪失して暴力に至るといいう、ホロコーストに類似した極限状況がいつの時代にもあると知らされる。ホロコーストとは特殊

な時代、地域の悲劇ではない。マラマッドの言うとおり、「万人はユダヤ人なり」なのである。

たしかに、広島、長崎の悲劇のみならず、それに続く戦争と虐殺、それに伴う難民問題、生物の無差別虐殺や自然の崩壊、家庭や職場の差別問題など、著者の指摘は鋭い。

第二章から第九章まではソール・ペロー、バーナード・マラマッド、I・B・シンガーとI・J・シンガーの兄弟など各章一人ずつ作家に焦点をあてて彼らの苦闘を辿り、それぞれの問題を考えていく。この八人のなかには一般の読者にはあまり馴染みのない作家もあるかもしれないが、そこで提起される問題と解説が分かりやすく、実際に作品を手にとって読んでみよいうという気にさせてくれる。しかも、各章のテーマが有機的につながって、ユダヤ系作家たちの全体像が見えてくるのである。

さらに、ユダヤ系作家だけでなく、井伏鱒二『黒い雨』、井口十郎『蟬時雨』、北杜夫『夜と霧の隅で』、中野好夫『人は獣に及ばず』など日本人の著書にも触れられているのは、こととはヨーロッパ、アメリカに限らず、世界全体に遍在する問題であり、日本人として取り組むのだ、との認識が根本にあるからであろう。著者の苦学生時代からの真摯な姿勢が窺われて、同年代の筆者も励まされる一冊である。(大学文学部英米文学科教授)